

## 持続可能なまちづくり、むらづくり スローな未来へ

2011年11月3日、札幌市のかでる2・7で、NPO法人わが村は美しく—北海道ネットワークの主催するフォーラム「接続可能なまちづくり、むらづくり スローな未来へ」が開催されました。フォーラムでは、最初に日本でスローフードが広く知られる契機となった『スローフードな人生！—イタリアの食卓から始まる』の著者、島村菜津氏の基調講演「スローな未来へ〜」の後、共催団体である一般社団法人シーニックバイウェイ支援センター、NPO法人「日本で最も美しい村」連合、NPO法人ガーデンアイランド北海道、エコ・ネットワーク、オホーツク・テロワールによる未来のまちづくりに向けてのアピール、パネルディスカッションが行われました。本稿では、そのうちアピールとパネルディスカッションを紹介します。

### 未来のまちづくりに向けたアピール

#### (一社)シーニックバイウェイ支援センター



かとう けいこ氏  
シーニックバイウェイ支援センター事務局長

シーニックカフェは今全道で17カ所あります。地域の人が景観のいいところにコーヒーの飲めるデッキを整備し運営。地域の人たちは毎週これを楽しみにやってきて、その景色の中でお弁当を食べたり、本を読んだり自由に過ごしています。募金箱も置いており、集まった温かいお金で運営しています。

シーニックバイウェイには、全道で12カ所のルートがあります。一つの町ですべてを満足させることができないので、みんなで良さを広く共有しあいましょう、小さな町では情報発信が十分でないので、みんなで観光ルートを作り必要な情報をピンポイントで伝えま

しょうというのがその考え方です。

支笏湖・ニセコルートは国立公園の中であり、洞爺湖や支笏湖といった有名観光地もありますが、私が自慢したいのは、千歳空港から市街地に入るところに地域の人たちがウエルカム花ロードというお花を植えておもてなしの心を伝える道を作っていることです。また、ニセコでも地域の人が羊蹄山が「ここから見る山が一番きれいだ」という場所にシーニックデッキを置いて、どうぞ自由に見てくださいと言っています。

このように地域が自慢したい、子供たちに残したいものを、地域の資源としてシーニックバイウェイでつなげて、維持していこうと、全道で340団体、3万人ぐらいのボランティアの方々が活動しています。

#### NPO法人「日本で最も美しい村」連合

日本で最も美しい村連合は、美瑛町で登録したNPOです。全国展開しており、参加44町村。北海道では美瑛、赤井川、標津、鶴居、京極、東黒松内が加盟しています。

いろいろな町村を回って感じる問題は、高等教育で町を出て行った子供たちが将来また町に戻ってくるかどうかです。いかに持続可能なコミュニティを構築するかが問われています。

そのためには、自分たちの町や村への愛郷心を育てること、地域資源を活用して若者の雇用を生み出すことが大事です。地域の素材を使って地域で付加価値をつけ、若者の雇用を生み出し、5~10人規模ぐらいの事業がたくさん生まれるようにする。また、地域の中で経済が回ることが重要です。自分の村にある食材を食べる、安いからといって外のものを買うと地場の安



杉 一浩氏  
NPO法人「日本で最も美しい村」連合理事

くていいものがない。

それから、通過型ではなく、滞在型ツーリズムが最大の課題です。私たちの連合は、都市のサポーターと地域の自治体による理念共有型のゆるい組織です。2010年には「世界で最も美しい村」協会に加盟、仏、伊等に習い5年ごとに再審査をして、料理や商品開発など地域資源の活用がどれだけ進展したかを見えています。

都市のサポーターは個人ベースで参加している人が多い。そこには都市の食品メーカーが加工ノウハウを提供したり、理念を持って市町村に入ってフィールドワークを展開している個人サポーターがいたりします。

### NPO法人ガーデンアイランド北海道



有山 忠男 氏  
NPO法人ガーデンアイランド北海道事務局長

「北海道を美しい庭園の島にしよう」というのが私たちのスローガンです。北海道には美しい風景や素晴らしい庭園や公園がありますが、単独ではなかなか力が出ない。何とかつないで北海道の大きな力にしようというのがそもそもの発想でした。

最初のきっかけは、花博を北海道で開こうと関係者が集まったことです。一つの場所での一時のイベントでは持続性がない、住民も参加して北海道全体が花の会場になるような取組みができないかと考え、2003年から活動を開始し、08年に全道をつなぐイベントを開催しました。

北海道は、気候風土そのものが特徴的であり、オープンガーデンのような先駆的な取組みや民間企業が整備した魅力的なガーデンなども多く、他の県ではできないことが北海道ではできるように思います。

イベント終了後は、北海道庁の事業で道立公園11カ所で花の技術指導と花に対する住民の意識啓発を目的とした花会議を開催、園芸技術のスキルアップ、人材育成に取り組んでいます。

植物やガーデンづくりの知識が豊富でガーデン文化を重んじるイギリス人はガーデンピープルと呼ばれます。チューリップで知られるオランダは、花産業を国家戦略として育てようとしています。北海道は、まさ

にイギリスやオランダのような地域づくりが必要なのではないかと思います。

### エコ・ネットワーク

エコ・ネットワークが目指している一つは、環境ボランティア。もう一つは、自然系のことだけではなくて環境に対する意識を高めること。そして、フットパスです。

本場のイギリスでは20万kmを超えるフットパスが整備されています。海外を歩いて、思うのは、フットパスはやっぱり北海道が一番合うということですね。例えばシーニックバイウェイでは、自動車道路とフットパスを組み合わせると、今までとは違った楽しみ方ができる。ただ歩いて汗流すだけではなくて、そこでしか食べられないものなどを組み合わせることでより一層密度の高い活動になる。農業もそうです。南幌はキャベツが多く採れるところですが、歩いた後、キャベツを使った料理をみんなで作るというような、プラスアルファを付加することで、無理のない農業体験ができる。そのようなプラスアルファ型のフットパスをつくりたいと思っています。

今、道内に40を超える地域、市町村に百数十のコースができており、間違いなく北海道は日本で一番進んでいる地域です。今後それらをいい形につないでいくという作業が残っています。

### オホーツク・テロワール



大黒 宏 氏  
一般社団法人オホーツク・テロワール代表理事

私は酪農家の4代目です。興部で一番農家戸数が多かったときは1,100戸ありましたが、今は78戸です。同時に学校も縮小して、高校や病院もなくなるという勢いでした。どうしたらいいかと考えていたときに、哲学者の内山節<sup>たかし</sup>\*1先生の本に出会いました。それによると、フランスの農村は50年前に人口が10分の1、農家戸数は50分の1になった。そこで、パリ一極集中を解消して、農村の景



小川 巖 氏  
環境市民団体エコ・ネットワーク代表

\*1 内山節  
1950年生まれ。元立教大学大学院教授。NPO法人森づくりフォーラム代表理事。主な著書に『自然の奥の神々』『怯えの時代』『星』という思想』『存在からの哲学』。

観や地域の技術を高めることに力を入れた本格的な農村づくりが始まったと言います。

自分は感動して、フランスの山の中に行って牧草畑を見て驚きました。日本では絶対に考えられない花畑のような雑草畑でした。そこで素晴らしいチーズができる。チーズも殺菌しちゃう駄目。牛乳を置いておくと必ず発酵する。殺菌しないでおくと、外から来る大腸菌などと戦うために乳酸菌が増えて、どんどん味が変わっていく。すごく苦くて食えなかったりもしますが、それが地域の味、テロワールです。それをフランスで教えていただき、何が何でもテロワールをやらなきゃと日本に帰ってきました。一緒に行ったオホーツクの仲間などで組織を立ち上げ、活動しています。

## パネルディスカッション

### “ずっと暮らし続けたい” 北海道のまち、北海道のむら

中井 「わが村は美しく」は、景観、地域特産物、人の交流の三つの分野の活動を表彰し、小さい取り組みでも広く知ってもらうことを目的に活動しています。それを後方支援するのがわが村は美しくー北海道ネットワークです。皆さんからお話いただいた活動も、長く続けることで結果が出てきます。また、各団体がさらに連携することにより、もっと強い力になっていく気がします。



中井 和子氏  
NPO法人わが村は美しくー北海道ネットワーク  
理事長

### 北海道には本当の人間の豊かさがある

杉 私は全国のいろいろな美しい村を巡って、外国人訪問者には必ずインタビューを心掛けています。美瑛町の同じ宿に毎年1週間連泊している香港に住んでいる中国人家族に、なぜかと聞いたら、北海道に来る一番の理由は子供の教育のため。北海道の人は優しいし、まちは清潔、安全、景観もいい、何よりそのペンションのオーナーの人柄がすごく素晴らしい。本当の人間としての豊かさが美瑛の丘にはあると言われます。そういうのはみんな口コミで伝わるのです。

もう一つ、北海道は自然が豊かなので人が集まる、人を引きつける魅力があると思います。地域の活性化には人が集まることが大事です。今日いろいろな方の意見を聞いて、多様性が大事ですが、それが北海道にあると思います。その意味では北海道は完全に全国区ではないかというのが私の印象です。

### ないものねだりからあるもの探し

島村 東北民俗学の結城登美夫さんが「ないものねだりからあるもの探し」ということを提唱している。同じことが、イタリアでも70年代後半から言われてきました。それをまず、みんなでやりながら、地産地消の必要性を訴えたり、農家民宿を増やしたりする中で、一つ一つ地元のものを見つけていったんです。



島村 菜津氏  
ノンフィクション作家

その中では、よそ者が結構使えるのですね。外からきた人には良さが見えるので、杉さんみたいな人が関わることで、美しい村連合が活性化するのは。美瑛ではジャガイモ畑が限りなく広がっている光景に感動しましたが、地元の人たちは自分たちの持っている広大な土地や畑が美しいとは、ついても思っていないふうでした。足下にあるものがすごい宝であることに気づくには、いろいろな人が入ってきて、いろいろなことを言い、いろいろな気づきがないとなかなか難しいという意味で、異物が入ってくるってことは大切ですね。

### 6次産業化と北海道の酪農

大黒 学生のころの興部は北海道中で一番観光客が少ない町だった。周りは規模拡大して人がいなくなる。それではもう少し加工をやって雇用の場をつくらうと必死に20年間やってきました。それが6次産業化だったのかなと思っています。

酪農業の世界で一番もうかっているのは東京周辺です。北海道より乳価が高い。しかも、飼料は輸入穀物主体が一番安いのは千葉の港から来ます。土地がなくても、アイスクリーム工場を建ててやっている農家が一番もうかっている。それを国は6次産業化と言って

推進している。TPP<sup>※2</sup>と言うが、国内でさえ価格が均一化できない状況の中で輸入自由化はとんでもないことだ。北海道の酪農は駄目になってしまいます。

### 北海道の歴史をつなぐフットパス

**小川** 全道にフットパスのコースを性格や目的で分類すると八つになる。まず農と食で一つ、次に地域振興、観光、自然保護、景観、歴史、交流、それから健康です。非常に多様です。それらが二つ、三つオーバーラップしながら進められているのが実態です。

例えば、えりも町では1800年頃、徳川幕府直轄事業として山道が作られている。当時は船を使って物資を運んでいましたが、海が荒れると1週間～1カ月上陸できない。それで山越えの道を作った。それが昭和30年代まで使われていた。

それから、上富良野町は自衛隊駐屯地があったこともあり、隣の美瑛町とは対照的に観光などにはあまり力を入れていなかったのが、3年前からフットパスで盛り返そうと、今は11本もコースがあり、結果的に長期滞在に結びつけています。

### ガーデニングからまちづくりへ

**有山** 北海道の花とってすぐイメージするのは、ラベンダーやシバザクラなど。しかし、大雪山の高山植物など自然の花もたくさんあります。

そうした素晴らしい素材を組み合わせることで、北海道の生活環境が豊かに、週末の過ごし方も楽しくなっていく。北海道の人はこうした環境をもっと大事にして自ら楽しむことを考えるべきです。

花も見るだけでなく、自ら手を動かしてすることも大事です。そういう機会を作ってあげたいと思います。オープンガーデンは個人の趣味の世界かと思われるかもしれませんが、オープンガーデンが3軒並ぶと、一つの町並み景観になります。花づくりやガーデニングは、まちづくりそのものだと思います。

### スローシティの基本は歩いて楽しめる町

**島村** 皆さんの世界を二つ、三つ、四つと組み合わせると、また新しいものがたくさんできると確信しました。

例えば、スローシティ<sup>※3</sup>で一番大切にしているのは、歩いて楽しめる町です。車の便利さは否定しません。じっくり大地を踏みしめて歩き、小動物と目があえば立ち止まり、農家の人がいたら質問して、できればそこに泊まって、朝靄の中でもう一回歩いてという旅をする。それで長期的にファンになってくれるし、お金をちゃんと落としてくれます。

**杉** 私が北海道の美しい村連合に加盟している町村に特にお願いしたいのは、食泊分離のモデルと、冬にどうやって集客するかというモデルをぜひ作ってもらいたいということです。

### 普段やっていることをおすそ分けする

**かとう** 十勝に小麦ツアーをしたときに、朝ごはんは焼きたてのパンを食べようと帯広市の住宅街にある「麦音」というパン屋さんの屋外カフェでパンを食べました。小さい小麦の畑もあり、粉をひいて焼くところも全部見せてくれるパン屋で、好きなパンを食べ、おいしいスープを飲みました。すると、ほとんどの人がツイッターやフェイスブックで自然に発信を始めてしまいました。「どうだ、俺たちすごいところで食べているんだぞ」と、そのぜいたくさをみんなに言いふらしたくなったんですね。パン屋さんも本当に喜んでくれました。私は、とってつけたようなサービスではなくて、普段その町に暮らす人がやっていることを「よかったらどうぞ」みたいな形でおすそ分けして、伝えていけばいいのだと感じました。

**中井** 地方の時代は北海道が最先端にいるということですね。地域の素晴らしさに気づいてほしいし、子供たちにきちんと伝えてほしい。そのためにも、いま現場で活躍されている方々がもう少しいろんな形で連携していけば、もっと大きな可能性につながっていくように思います。

※2 TPP (Trans-Pacific Strategic Economic Partnership Agreement)  
環太平洋戦略的経済連携協定。

※3 スローシティ (Slow City)  
1998年にイタリアのオルビエトでスローフード運動の年次総会に集まった首長らによって始まった運動。住民が主体的にかかわる、人々が自然や食とのつながりを持ってゆったりと暮らす人間サイズのまちづくり。